

ぶらぶら探検講座・緑ヶ丘地区マイスター研修 報告書

1 実施日 令和6年11月17日(土) 10時～12時まで

2 参加者数 10人

3 研修内容

本研修は、令和3年度に緑ヶ丘公民館開館50周年を記念して作成した記念誌に端を発している。

令和4年度には、緑ヶ丘地区の歴史、文化、伝統、自然を広く伝導し、ますますの緑ヶ丘ファンを醸成するための「緑ヶ丘地区マイスター」を創設し、認定を始めた。

更に、令和5年度には、地域の文化財を始めとした案内図と著名な方々を紹介した「ぶらぶら探検マップ」を作成した。

今年度は、緑ヶ丘公民館 学級・講座開設等委員会との共同で、マイスター認定者及び希望者を対象として、このぶらぶら探検マップを活用した研修講座を実施した。

当日は、ぶらぶら探検マップを片手に、文化財保護担当職員の解説を聞きながら地域を探索した。

参加者からは、「思ったより、歴史のある地域だとわかり驚いている」、「緑ヶ丘地区の文化の高さを実感した」などの高評価をいただいた。

今後については、更に、広範囲に緑ヶ丘地区の歴史と文化を広めるために、当地域の魅力をSNS、メディアや紙媒体の充実によって発信するとともに後世に伝播する仕組みを構築する必要がある。

1 王子神社 鳥居の礎石(緑ヶ丘公民館)

「緑ヶ丘小学校校庭付近に、王子神社への参道入口があった。畑の耕地整理のため穴を掘ったところ、細かい玉石とともに平らに敷かれた二つの石が出てきた。王子神社の真正面を向いていたので、鳥居の礎石と思われる。この辺りは、古地図に鳥井戸と記されている。」とあります。以前は、緑ヶ丘小学校入口バス停付近に置かれていましたが、スーパーマーケット等を解体する際に、緑ヶ丘公民館の敷地内に、史跡として移設をしたものです。

明治27年2月10日神社明細取調書には、勧請不詳、弘安4年 堅固山福伝寺と書かれた棟札があり、この年をもって再建をしたものと考えられます。

神社から南の方、四町二五間(約481m)に、かつて鳥井戸と称するところに2つの石があり、この石が「鳥居の礎石」です。



緑ヶ丘公民館敷地内 鳥居の礎石

2 榎(えのき)

・榎の解説

緑ヶ丘5丁目の榎(えのき)ー緑ヶ丘5丁目6ー30付近

緑ヶ丘4丁目との境の緑ヶ丘5丁目側、駐車場の敷地内に、榎があります。大山参詣の脇往還や産業用道路として、林から愛名にかけて尼寺原を横断する愛名海道が作られました。この道路の目印として、榎が何本か植えられたそうです。

平成17年5月ごろ、枯れてしまいましたが、同年11月に植え替えられた榎が現在のものです。



3 福伝寺

・福伝寺の解説

王子にある福伝寺は、曹洞宗の長生寺の末寺で、寛永14年(1637年)に建立されました。

元来この地は、笠間六郎の居城跡で、真言宗善福寺という七堂伽藍の寺があつて、王子権現、王子稻荷両社の別当(管理、管轄の意)寺でありました。

この善福寺は、天文年間(1532～1555 年)に兵科によって焼失し、その後、67年を経て、長生寺11世の白鳳宗淑大和尚が来地してこの地に開山したといわれています。

本堂、庫裡、山門(旧荻野山中陣屋の裏門を移設)が敷地内にあり、御本尊様は、釈迦三蔵尊、地藏菩薩座像、道元禅師像、千手観音立像、十一面観音像、阿弥陀如来像などが安置されています。



福伝寺 山門

- ・板碑の解説

寺内にある板碑は、市内に現存する最古のもので、弘安4年(1284 年)のものと考えられています。



弘安の板碑

4 王子神社

・王子神社の解説

「王子権現社、社地に弘安4年 相模守平時頼と刻す。今年は時頼卒後18年に当たれり、是も後人の贗造なり」。新編相模国風土記稿はこのように記されています。

王子稲荷は、当時、福伝寺持ちとあり、この権現社の古碑のことと同一の記載がされていました。両社は、王子にあり、天保期(1830～1843)にはここにあったこととなります。

しかし、厚木市文化調査団では、「相模守平時頼」と後人が刻み加えたもので、平時頼が王子権現を勧請したとの伝説を信じた人が書き入れたようだとしています。

昭和11年10月の記録簿では、「建長年間に北条時頼が王子権現、王子稲荷の両社を戊亥除けとしてここに建立した」と旧記にあるとされています。社殿再建と石の鳥居を立てたとなっており、社殿には、径10センチメートル弱のやや楕円形黒石と文政10年の棟札が納められています。

文献では、弘安の古碑に関心が寄せられてはいますが、東京に郷社王子神社があり、この郷社は、元享年中、紀州の熊野神社を分霊遷座してものと言われています。

福伝寺には、弘安4年の古碑と王子権現の御神体が保存してあるとされています。

明治27年2月10日の神社明細取調書では、この辺一帯、尼寺原とて古くは尼僧が住み、七堂伽藍あったと伝えられ、当時の規模も推し量られるとあります。



・円形古墳の解説

縄文時代中期を主体とする集落遺跡です。尼寺原の東端の台地にあり、標高は約70メートル、遺跡の南東部に王子神社が鎮座し、県水道配水池工事で墳裾を削られた円墳が1基あります。

尼寺原の平坦な台面は、早くから開墾され、付近一帯の畑からは、土器、石斧、石鏃などが多数発見されており、古くから遺跡自体の存在が知られていました。

- ・人体装飾付き有孔鏝付土器の解説

宅地開発に伴い、昭和43年夏の予備調査では、住居跡8軒、石組炉などが発掘され、昭和47年の7か月に及ぶ本調査では、人体装飾付き有孔鏝付土器(ゆうこうつばつきどき)が出土されました。

現在、県水道配水池の横に円墳が1基あり、かつては古墳群が形成され、調査区域からも3基の円墳の周溝が発見されました。縄文、弥生、古墳時代と、継続期間が長かったことがうかがわれます。

なお、人体装飾付き有孔鏝付土器は、イギリスの大英博物館で展示をされました。

5 道祖神

- ・道祖神の解説

道祖神は、村の守り神として、多くは村の中心、道の辻、三叉路に立っています。村人たちが五穀豊穰、無病息災、子孫繁栄を祈願するもっとも身近な神として、男女像を独特の知性とユーモアで造り上げたものです。

多くの場合、道祖神と同じところに庚申塔などが祀られています。

